『比較民俗研究』8．1993／9

研究ノート

日本民俗学における地域研究

何　彬※

序　日本民俗学

一　民俗の地域性
　1．地域性への認識
　2．研究法――周圏論ほか

二　民俗誌作成の歴史
1．戦前の民俗調査と民俗誌
2．戦前の民俗誌

三　民俗地図
　1．地理学と民俗地図
　2．民俗地図の種類・解釈法
　3．二つのレベルの民俗地図
　4．民俗地図の再検討

四　中国民俗学における地域研究
　1．地域意識
　2．民俗誌の現状

むすび

序　日本民俗学

日本の学術世界における様々な学問は，ほとんど欧米から学んできたものであり，欧米で出発した学説を日本に引き入れたものに対して，民俗学は日本国内で発展してきたものである。農政学者でもあった柳田国男は1930年代の「昭和恐慌」をきっかけに，「学問救世」，「経世済民」という使命感を持ち，「農民はなぜ貧しいか」という課題を解答しようとして，日本民俗学を体系化した。

※北京師範大学中文系博士課程

柳田国男の創立した学問とされている日本民俗学は，三つの特徴を持っている。その一，日本民俗学は非常に幅広い学問であり，人間の生活の各方面にわたって，研究を行うものである。イギリス，アメリカ，ロシァなどの国の民俗学は，研究範囲をおもに口承文芸，民間音楽，俗信などに定め，中国では民俗研究より口承文芸の研究が盛んに行われていた。これに対して，日本民俗学の範囲は，村落社会・家族・親族・同族・生業・農耕儀礼・年中行事・人生儀礼・信仰・芸能・口承文芸・祭祀などにわたって，分野としては，有形文化・言語芸術・心意現象と三つの部門にわけられている(1)。その二，日本民俗学は歴史学との関係が強い。現在行われつつある民俗現象から民俗の歴史を再構成し，「平民の過去を知ること」(2)が民俗学の目的とされていた。戦後，民俗学の反省によって，研究目的も議論されているが，歴史的な色彩が濃いのが現状である。その三，一つの学問として，個人の力によって開始されたことは，日本民俗学におけるもう一つの特徴である。

柳田が30年代に書いた『民間伝承論』[1934年]，『郷土生活の研究』[1935年] は民俗学の目的，内容と方法などを論じ，日本民俗学における重要著作である。柳田の民俗学に関する説は，後日の日本民俗学に大きな影響を与え，日本民俗学の主流は柳田民俗学とも呼ばれている。特徴の一，二も柳田国男によってなされたものとも言える。柳田の提唱した，後に日本民俗学の方法論の中心になっている重出立証法，周圏論は地域民俗という視点の上に立っている。拙文は，地域について研究を進める日本民俗学の側面を検討することにしながら，中国民俗学の学べきものをも少し考えてみたい。

［この文章に使用した資料は筆者が日本留学中に集めたものであったため，1989年以後の資料は本文に用いられていないことをここにお断りしておく。］

一　民俗の地域性

1．地域性への認識

一口に民俗研究と言っても，日本列島の細長い地形は「自然的・地理的諸条件が非常に複雑であり，そのために生活の様式も地域によって多くの変化を見せている」(1)と日本の民俗研究者は環境により民俗文化がそれぞれ違うことを指摘している。

日本民俗学の創始者である柳田国男は地域の民俗調査を重視していた。「今日，昔風と称して珍しがられ又は懐かしがられているものの，各人が互いに地処の例を知らぬだけで，実は土地毎に境遇の異なる毎に，驚くようないくつもの相違があったのである。」(2)と柳田が述べて，「そのかわった仕来りは一部分今も地方に残り，もしくは現今の新しい式に影響している」(3)ことを認め，さらに「我々の慣習は土地により，又は当事者の身分環境によって，近世は既にいく通りかの種類に分かれていた。それが最初からの系統の別ではなくして，元一つのものの追々に進化していく段階を代表していたのだ。」(4)と指摘し，民俗が地方によって違いがありながら，そのもとは一つのものであって，地域ごとの調査資料を集め，比較をすれば，その歴史的な変遷がわかると柳田は考えた。そこで，「・・・中古に必要があって何度も改められ，その変遷のそれぞれの段階が土地の状況によってまだ保留せられているのである。故にもし注意深くこの各地のちがいを比較してみる人があるならば，ある程度までにこの推移の跡を明らかにし得る筈で，すなわちこの方面に於いては，殊に民俗学が功を奏しやすいと認められている理由である」(5)「地方差はすなわち時代差を示す」と説いて，各地における異なっている民俗の比較を通して，日本民俗の伝統的な民俗文化の史的な変遷を辿りつけるという柳田民俗学の主な目的を指摘した。

柳田国男は地域的に民俗の差異があることを認め，重出立証法，周圏論もそれを基礎に形成したものである。しかし，いくら狭い日本国土と言っても，自然環境や，社会的構造の違いがありその地域地域には，特性がある。それをよく理解しないと，周圏論的な研究法で全面的・全国的に比較しても，民俗の本来の姿がつかめないと諸学者がのべ，全国範囲の研究を行う前にまず地域毎に研究し，その特徴を把握すべきであると主張した。

桜田勝徳は地理と民俗の関係について，こうのべている。「わが国は北の端から南の端まで，気候風土に著しい相違があります。・・・このように単なる地理上の位置の差異が村人の体質気風・習俗や技芸の発達に，夫々の利益や妨げをもたらし，更にこの自然の条件に調和するために，様々な生活様式が生じています。それで村々にあたってみますと，夫々特有のものを持ち合わしていても，丸まる同じだと言う村はありますまい・・・」(6)村落それぞれ民俗の一つの有機体であり，「村が一定の土地すなわち地域と結び付いて，その村の外部との関係を打ち出し，その関係のもとにその村の地域的な枠が定まっていることはいうまでもない。」(7)と村々には個性があることを指摘した。

坪井洋文が「年中行事の地域性と社会性」の論文に，地域毎に行事の形式・内容が違ってくることを論じた。「厳密には，生業が同じでも地域が異なれば，そこで維持されている行事はまったく同一とは言えないし，行事を担う人間集団のあり方が異なれば，行事の性格や意義も異なってくる」とのべた。坪井氏は同じ論文に地域文化を理解するには，地域集団つまりその地域で生活している人間集団を理解すべきだと主張して，「人類の生活は，自然に対する順応と人間集団に対する適応とによって営まれるが，集団によって生み出され，ささえられている文化は，その集団を無視しては十分に理解することができない。」と指摘し，地域環境とその環境の中で生活している地域集団に

ついての研究の重要性を強調した。

このような認識を基礎に，1950年代の後半から，何人かの民俗学者が「民俗の地域性」または「地域差・地方差」という概念を打ち出した。

――――「民俗の地域差はきわめて複雑な様相を示しており，そのような地域差の上に日本の民俗は成り立っているのである」[8]

――――「民俗が民族を異にするごとに差異を持つのは当然であるが，同一民族の間にあっても居住地を異にする住民集団の間に民俗，慣行の差異が認められる。これは民俗の地方（地域）差といわれるもの」[9]さらに，千葉氏は「質的な民俗の地方差」と「量的な地方差」と二種類に分けた。

――――「年中行事の地域性とは，自然条件によって特徴づけられる行事の地域的性格をさし」ていると坪井洋文も定義した。[10]

以上のように，日本の民俗学者は自然・地理条件により，地域的な文化が異なっているその地域地域の民俗を知るには，その地域の自然環境を重視すべきだと強調したが，同時に，その地域毎に異なっている社会条件・環境または「地域集団」をも注視すべきことだと明確に指摘したのは坪井洋文と千葉徳爾氏だけのようである。

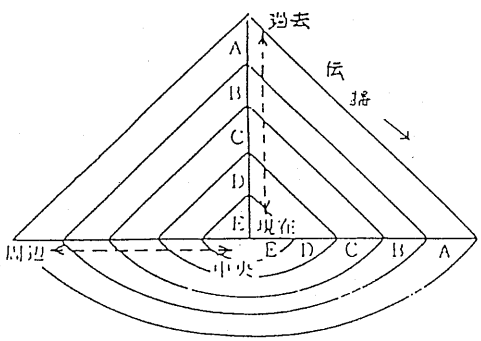
2．研究法

以上，民俗の地域特性について，日本民俗学者の見解を述べた。次に地域の民俗を研究する方法（主に周圏論）について，少し検討してみよう。

前にも述べたが，柳田国男は地域的に民俗が異なることを認め，その地域的な民俗の差は民俗の歴史的な変遷を示していると説いた。日本各地の民俗伝承の異同を比較して，それらを重ね合わせ引き比べる方法，すなわち民俗の経てきた歴史的変遷を文化の周辺地域から中心地に向かって民俗の地域的変異を明確にする重出立証法・周圏論を打ち出し，後に日本民俗学の主な方法となった。

周圏論は地域地域の民俗のあり方を解釈し，認識する方法である。それが柳田国男は「方言周圏論」として『蝸牛考』[1]という論文に最初に提出したものであった。柳田国男は『蝸牛考』を通して蝸牛についての日本各地の方言を集めて，その分布から蝸牛を示す言葉の変遷過程を明らかにした。そのことを通して，方言の分布は近畿を中心として，いくつかの圏を描いていてしかも遠く離れている国土の両端には，方言の似たことが多く，言葉の古い姿を示していると方言の分布，伝播について一つの仮説――方言は周圏的に分布，伝播する――を提出した。その分布から語彙の旧→新への変化過程を再構成できるという方言資料の認識方法を打ち出し，遠いところに古語の姿が保存されていると主張した。

「もし，日本がこのような細長い島でなかったら，方言はおおよそ近畿をぶんまわしの中心として，段々にいくつかの圏を描いたことであろう。」［『蝸牛考』P 262］「方言の地方差は大体に古語退縮の過程を表示している。」[2]と指摘して方言の周圏的分布から歴史的な変遷を読み取り，中央から遠く離れる地域にこそ方言の古い姿を保っていると主張した。現代の日本民俗学者福田アジオが，柳田の説を模式化して，次の図のように整理している[3]。



周圏論の模式図

柳田の説によると，中央で常に新しい言葉や文化が起こり，それが全国へ波及して行く。その繰り返しの中に歴史の変遷がある。文化の中心地より距離的に離れた遠い地域に昔の文化か言語の古

い姿が守られている。模式図に書いてある。Eは常に新しい言葉を発生し，四方へ伝播する文化の中心であり，Aは中央から一番離れたところであり，古い文化を持っている地域である。E→Aへの段階は一つの文化現象が時間の経過を経て，変化の諸段階を空間的に示すものである。

柳田国男の文章に，民俗を周圏論的に理解しようとする考えが伺えるが，柳田国男の著作では，あくまでも方言周圏論であった。方言圏→文化圏への展開は倉田一郎が「農と民俗学」[1944]で提出した「文化の周圏」説が最初とされ，和歌森太郎「民俗の周圏的観察」(4)，民俗学辞典「民間伝承周圏論」(5)，牧田茂「文化周圏論説」(6)などが，方言周圏論の民俗周圏論，文化周圏論への展開，定着に大きな影響があった(7)。

その後，民俗学研究の方法として，周圏論が広く使われていたが，それについての反論もあった。千葉徳爾は，日本とフィンランドの地理条件が違うので周圏論の適用性に疑問を持ち，周圏論は民俗を受け入れる住民とその地域の具体的な条件を無視して，中心から周辺へ文化の一方的流動の通過地としかされていないと批判し，民俗事象の周圏的分布は，「日本国民の組織化過程が周圏的に行われたことを反映するものである」(8)と主張した。桜田勝徳・宮本常一は，「筌」の方言の分布，「コケシ」という玩具の存在地域とオシラさまの信仰分布などを周圏論で解釈できない現象をとりあげ，周圏論は通用できないと指摘し(9)，また，周圏論には「中央で発生した文化が各地に波及してゆくときに，それに対応した各地方が選択したり，拒否したり，あるいは変化させたりしたという視点」と「民俗が特定の地域に分布することの意味，理由を明らかにしようとする視点がない」と指摘し，民俗学にとっては方言周圏論あるいは民俗周圏論は破棄させねばならないと主張した学者もいる(10)。さらに，実地調査の例で，周圏説を反対に解釈し，すなわち，文化の中心こそ古い姿があり，拡がりにより変化が起こるという逆周圏説も提出された。(11)。

柳田の周圏論のほか，地域民俗を研究する方法がいくつかあった。民俗学者岡正雄は柳田の日本単一民族・単一文化説に反対して，日本文化は多種文化の複合したものであり，日本文化の地域性を把握するため，比較民族学の方法を提出し，山口麻太郎は地域民俗研究には，まず民俗が有機的につながりあって構成している「民俗すなわち伝承単位体なる村落」の地域民俗誌をつくらねばならないことを主張している。

また，小野重朗が地図で民俗の分布を明らかにすることを言い出し，その地図がそれまでの民俗地図と違い，一つの地域におけるある種の民俗の分布を全ての村落を調べた上で，「ある民俗の存在と非存在をはっきりと線で画した地図」(12)——「圏地図」である。そして，圏地図の中心こそ地域の民俗文化の中心であり，古い文化の姿を残していると柳田の周圏説を用いて，逆周圏論を打ち出して，地域民俗の特徴と分布などにつき，ユニークな研究方法を提出した。

地域の民俗を把握するには，その基本構成単位体である村々の個性をまず把握すべきである。村の全貌をありのままに記録し，それを地域の民俗地図に描き込み，その地域範囲内で比較分析して，村々の民俗特徴と地域の特性，地域における文化の変遷などを明確にして，初めて地域民俗の研究ができる。一つの国，一つの民族の民俗文化が，こうした上に理解できると言えるのではなかろうか。この意味で，小野氏のように地域ごとに民俗分布図をつくり，その地域の民俗文化の中心を探し出す方法と山口氏の民俗誌をまず大量につくる方法がまず必要で，柳田の周圏論と重出証法は，むしろその次の段階に用いられる方法ではないかと思われる。

二　民俗誌作成の歴史

前章に述べたように，日本民俗学界は民俗には地域性があることにほぼ認識が統一されている。これを前提に，民俗調査によって，民俗誌と民俗地図の作成に大きな成果をおさめた。

地域民俗の記録である民俗誌の大量作成は日本

民俗学発展期の特徴であり，後日の日本民俗学研究の基礎をなし，後日の研究者に貴重な資料を提供した。この章では，民俗誌の歩んできた歴史を振りかえってみよう。

1．戦前の民俗調査と民俗誌

a．戦前の民俗調査

日本の民俗学における民俗調査は，かなり早くから始まった。民俗学者坪井洋文の論文「民俗調査の歴史」によれば，民俗調査を胎動期（明治17年～19年・1885年～1887年）・初期（明治40年～大正末年・1908年～1926年），発展期（昭和初期より二十年間・1926年～1946年頃）と分けられる。それぞれの段階にいくつかの調査の例も上げられている。

そのうち，一番注目されているのは，昭和９年（1934年５月）から三年間（1937年４月まで）にわたって行われた「日本僻陬諸村における郷党生活の資料収集」すなわち後日「山村調査」と呼ばれている日本民俗学における最初の大規模的な総合民俗調査である。その調査は，73人の調査者が日本全国各県の53ヶ村で，同じ100項目を持って，一ヶ所20日以上滞在して行われたものである。その結果は柳田国男編『山村生活の研究』［1937年６月刊］にまとめられた。

この山村調査では，100項目にのぼる「郷土生活研究採集手帳」によって聞き書きするのがその具体的方法であった。しかし，のちに民俗語彙を重視しすぎたという批判の声もあった。山村調査についての反省，批判が戦後かなりあったが，ここに，大間知篤三のことばを借て，その批判を示して見る。大間知氏によると，山村調査の不足・欠点は次の通りである。

① 民俗調査は数字資料に無関心で，データ資料をまったく扱わなかった。したがって，調査地の村の現状がわからないままに調査した。

② 古文書・古記録類の軽視。古くからの文字資料を十分に生かさなかった。

③ 民俗語彙の重視し過ぎ。

④ 調査項目による分断式の調査で，村全体を調査の対象としなかった。

1937年から二年間にわたって，「離島及び沿海諸村に於ける郷党生活の調査」が山村調査に継いで行われた。この「海村調査と呼ばれる調査活動は日本全国の海村30ヶ所を11名の調査者が調査する計画だったが，戦争のため14ヶ村で中止した。1949年刊行した「海村生活の研究」にはその成果を集めた。その具体的方法は山村調査とは大差なかった。

柳田国男の指導とは別に行われた民俗調査にはアチック・ミューゼアム［「屋根裏」の意］の活動があげられる。戦後「日本常民文化研究所」として活躍しているアチック・ミューゼアムが1922年渋沢敬三によって発足して，第二次大戦中閉鎖するまで，農・山・漁村の常民史料，農・漁村在住者の生活記録，調査研究などを出版し百数十冊にのぼった。

以上のように組織的な調査の外，個人的な民俗調査も行われていた。1908年７月13日から一週間，柳田国男は宮崎県の椎葉村に滞在して，その村で狩猟について，村の人を伺い，『後狩伺記』という民俗誌的な調査報告書を書いた。また，1937年８月に刊行したアチック・ミューゼアム彙報第23冊に宮本常一氏の「河内国滝左近熊太翁旧事談」がある。それは宮本氏がその村で７回にわたって左近熊太という老人の話を聞いて，記録した調査報告書であった。1934年にアチック・ミューゼアム彙報二として出版された竹内利美編「小学生の調べた上伊那郡川島村郷土誌」及びその続編がややかわった形の調査報告書である。教師としての竹内氏は小学生たちに調査項目を持って，1934年から４・５年継続的に調べてもらった民俗資料集的なものであった。

昭和初年から第二次大戦終了までの20年間に，民俗調査とその資料の集積が「今日の膨大な民俗資料の中核をなしている」[(1)]し，民俗学史に重きをなす発展期における特徴となっていると言えよう。しかし，戦前の民俗調査はただの資料収集

にとどまった場合が多く，柳田，宮本氏などの数人の学者のような調査をして，かつ研究する人がごく少なく，ほとんどの調査者は資料提供者としてしか調査を進めなかったことが戦前の民俗調査の欠点と言えよう。

b．戦前の民俗誌

戦前の民俗調査を言うと，必ず柳田国男の指導のもとで行われた山村・海村調査をあげるが，先に触れたようにその大規模な総合調査が分断式の調査方法を取り，民俗事象を100ヶ項目に分けて，採集手帳に書き込むだけで，その調査資料は村々の全体像を描く民俗誌にはなれなかった。

日本常民文化研究所［アチック・ミューゼアム］編集・三一書房の刊行した『日本常民生活資料叢書』が戦前の民俗誌集と言えよう。その全24冊からなった書は，民具・水産・農業・社会経済と各地方篇にわけて，当時の村々の生活像を調査者の手によって詳しく書いている。

この叢書は，柳田式の民俗調査と違って，それまでに発見された村々の古文書など古い文字資料もかなり重要視して文書資料も収録している［第十七巻・資料篇］。また，山海村調査に調査対象となされていなかった民具の調査資料も収録している［第一巻・民具篇］。

そのほか角川書店が刊行した『日本民俗誌大系』［全12巻］も地域別に民俗の伝統の姿を描いている。この大系は「民俗学の学徒はまず採集者でなければならない」という「鉄則」を強調しながら，「先人の業績については，再び，これが採集を行わねばならぬという労からは解放したい」という考えを出発点にし，「対象の諸資料をいわゆる「戦前」に限った」ので，大体は大正初年［1912年］から第二次大戦までの民俗誌的な記述を集めている。

戦前における地方編集の民俗誌が少なくないが，長野県の一例があげられる。それは，長野県北安曇郡教育会が編集した『北安曇郡郷土誌稿・全８輯』である。一つの郡で二年間［昭和８年～昭和10年・1933年～1935年］かかって調査採集して８冊の民俗誌として刊行した。民俗誌の歴史を述べるには，触れる価値のある一例である。

一言で言えば，戦前に民俗誌がないとは言えないが，今日のような村ごとに全面的に調べ，村を単位に詳しく民俗誌を作ることがなかった。有名な山村，海村民俗調査からできた『山村生活の研究』，『海村生活の研究』は，調査手帖の項目に従って各地の資料を集めたものだけで，民俗誌にはなっていない。

２．戦後の民俗誌

1949年４月～1951年10月に民俗学研究所が編集した『全国民俗誌叢書』［全７冊］が出版された。これが，1934年５月から1937４月までに行われた山村調査の基礎でできたものである。その山村調査は民俗資料を村落の生活から切り離し，全国規模の比較研究をして，その研究対象である村落を単なる資料獲得の場とし，のちに民俗学者たちの批判を受けた。その反省として，戦後，当時山村・海村の調査に参加した学者はそれぞれに調査地を村を単位にして，民俗誌を編成した。出版に事情があり，７冊［越前石徹白民俗誌・宮本常一，北小浦民俗誌・柳田国男，日間賀島民俗誌・瀬川清子，常陸高岡村民俗誌，桧枝岐民俗誌・今野円輔，美濃徳山民俗誌・桜田勝徳，黒河内民俗誌・最上孝敬］しか出版できなかったが，この民俗誌叢書は，対象地域を小規模に限定したのが特色のひとつであり，その調査参加者たちが自分の調査した村落の全体像を書いたことで民俗誌の歴史に意味がある。

1950年から三ヵ年にわたって，「本邦離島村落の調査研究」が行なわれた。戦後，山村海村調査に続き全国的で大規模な民俗調査で，19ヵ所の島で行った調査であった。この調査の結果として，『離島生活の研究』という報告書を集英社によって刊行された(1)。この『離島生活の研究』が，島ごとに民俗を全面的に把握し，調査地域ごとに民俗をまとめて記録しており，戦前の山村海村調査とかなり違ったやり方が見られる。民俗調査は

地域の民俗を地域文化の有機体と切り離さずに全面的に調べ，小範囲の民俗誌をつくり始めたのが，この1950年代であった。

1950年日本政府は「文化財保護法」を公布し，各地の文化財調査が始まった。調査の結果は「文化財調査報告書」の形で各県，市などから刊行された。文化財の調査のほとんどは，考古に限っているが，その中に，民俗も有形・無形文化財として，扱われたので，文化財調査の報告書には，民俗資料集も見られる。文化財保護法第2条第1項第3号によると，民俗資料の定義は，「衣食住・生産・信仰・年中行事等に関する風俗習慣，及びこれに用いられる衣服，器具，家屋その他の物件で，わが国民の生活の推移の理解のために欠くことのできないもの」となっている。これに従って，各地は民俗資料を集めてきた。例を挙げてみれば，次のようである。

静岡県文化財報告集第30・32集は「浜名湖における漁撈習俗Ⅰ・Ⅱ」[5]であり，第34集は，「静岡県の民謡」である。また，愛知県教育委員会1973年3月刊行の愛知県民俗資料緊急調査報告に，「愛知の民俗」があり，東京都教育委員会は1966年刊行の東京都文化財調査報告書第16集が，「東京都民俗資料緊急調査報告」となっている。このような調査報告書は，ある意味から，民俗誌的な資料になり，民俗誌作成の歴史には，触れる必要のあるものである。

戦後，特に1970年代に入って日本全土で市町村史の編纂がブームになった。市町村史のうち，地域の民俗誌として「民俗編」を設けているのがひとつの傾向となっている。「民俗誌及び市町村誌民俗編」は同じもので，「地域住民の視点から地域の生活の全体像を描くものである」[3]。1988年3月までの資料では，全国に3,721ヶ所の県・市・町・村が地方史・地域史をつくったが，そのうち，「民俗編」を設けているのが226ヶ所である［計画を立て，しかし未刊となっているものも含める］。編纂年代から見れば，最初は1950年代に1ヶ所，1960年代に10ヶ所，1970年代に46ヶ所，1980年代に135ヶ所，1980年代は圧倒的に多い。『宮城県史・全35巻』には，「民俗編」が3冊あり，1冊目は1956年10月に編纂され，戦後における初めての民俗編である。市町村史民俗編は民俗誌的な性格をもっているので，単なる民俗調査報告書と違っている。

山本質素氏が指摘したように，民俗調査報告書は資料提供の形で，項目を設け，分断式に民俗を記述するのが定型である。また，民俗調査報告書の取り扱う地域も範囲を広くせず，1ヶ所に限定している。これに反し，市・町・村史の民俗編は，なるべく民俗の関連性を考え，その地域社会に存在する民俗をその社会の中でどのような役割りを果たしているのかを念頭に置いてにして，地域的にはわりに広い範囲で民俗を全体的に把握するのが，作成の主旨となるべきである。彼が言うには，市町村史民俗編の記述法は，

(イ)個々の民俗資料相互の関連をできるだけ明らかにすることを前提にして

(ロ)資料に対する調査地域の関係は，単なる所在地としてだけではなく民俗資料を存在させる地域社会の（生活の）基盤が捉えられるように記述する。

(ハ)さらに，対象地域の中の個々の地域社会の差異及び全体像を，民俗資料を通して捉えることができるように記述する

ことであるべきである[4]。

民俗誌及び市町村史民俗編は，地域住民の視点から地域の生活の全体像を描くものであるという考えから出発して，岩田重則氏は戦後の市町村史民俗編の歩みをまとめたが，それを六点に要約した。

その一，「地域民俗の特色をまとめて述べる「概観」の部分を付け加える。」例としては，『小山市史民俗編』［1980年刊］には「生活の場所と概観」，『成田市史民俗編』には「成田市域の民俗の特色」がそれぞれ第一章として設けられていることが挙げられた[5]。

その二，「市内全域の民俗資料を項目にそって述べると同時に，小さな地域社会の民俗誌を設ける」。

その三,「市内を地形や生業形態の差などによって，いくつかに地帯区分をし，地帯ごとに民俗を述べる。」『成田市史・第十章・成田山と門前町』が例である。

その四,「ムラ部と対比して，マチの民俗を重視する方向が出される。」その傾向は1970年代からの市史民俗編に顕著になって来たということである。『佐野市史』[1975 3月刊]・第二章に「市街地の社会」節,『栃木市史』[1979年3月刊]第二章に「町の生活」,『浦和市史』[1980年3月刊]第三章に「職人・商人の暮らし」の節が設けられた。

その五,「市域の特徴的な民俗，例えば祭や在来工業（地場産業）などに大きな部分をあて，全体の記述の中心とする」。『小山市史』(6)第三章の「3・地域産業」,『佐野市史』第三章の「2・在来工業」,『栃木市史』(6)第三章「4・の鉱工業」などがそれである。

最後に，その六,「民俗資料の分類について再考し，独自の構成をつくる。」

1970年代に入って，民俗誌の作成に新しい傾向を示している。それが，民俗編をつくるため，まず民俗調査を行い，民俗調査報告書を刊行することである。『伊勢崎市史・民俗編』を編纂するため，地域別の調査報告書を八集刊行し,『静岡県史・民俗』の伊豆編を作るのに，6冊の地域別の調査報告集をも刊行しているなどが，その例である。民俗資料をより多く集め，民俗調査をより細かく行うことによって，その地域の民俗を全面的に把握することができるし，民俗研究に豊かな研究資料を提供する。このような民俗資料を多く刊行することが，民俗誌作成・民俗編を編纂する新パターンとなっていて，民俗誌作成の歴史における一つの新段階ともなっている。民俗学研究と民俗誌の作成にとって，非常によい傾向である。

各地の教育委員会によって，地域民俗が編集されるほか，大学で民俗学の授業をとっている大学生は民俗調査グループをつくり，各地で授業の実習という形で，村々で民俗調査を試み，その結果，一つ一つの村の民俗誌が作られた。例えば，東京女子大学に民俗学,民俗調査の授業が設けてあり，1962年から年々民俗調査を行い，年に一冊調査地域の民俗誌を作成する。今まで16冊を編集出版して，1986年と1987年の調査報告書もすでに完成して，出版する予定である。武蔵大学「日本民俗史演習」の授業も民俗調査を行い,『武蔵大学日本民俗史演習調査報告書』を編成し，1978年から1987年まで年1冊，合計10冊をつくった。

また，聖心女子大学も同じく民俗実習を行っている。埼玉県入間郡鶴ヶ島町［現在，市となったが］教育委員会・町史編纂委員会の町史・民俗編の協力者として，鶴ヶ島町内の村々を幾年も続けて民俗調査をしてきた。調査の成果は町史編纂委員会に提供し，町史民俗編をつくる基本的な民俗資料となっている。

大学授業以外に，大学研究会の形で，サークルで民俗調査を行い，一つ一つ村の民俗誌を作るのは，もう一つのパターンである。国学院大学民俗研究会が『民俗採訪』を刊行し，年に2ヶ所か3ヶ所の村で民俗を調査して報告書にする。筆者の資料収集は不充分であったが，手に入った資料によると，1951年から1972年まで，すでに24冊を出版した。また，東洋大学民俗研究会も，1964年から1976年まで各県で民俗調査をして，計13冊の調査報告書を刊行した。

このように，戦後の民俗誌は

(1). 戦前に調査した資料で再構成した民俗誌叢書

(2).「離島生活の研究」のように，小範囲内で全面的に調査した民俗誌

(3). 文化財調査報告書,

(4). 県・市・町・村史民俗編

(5). 大学民俗調査グループによってつくられた調査報告書

などの形で発展してきた。

70, 80年代に入って，民俗編資料集も刊行され，民俗編の作成について，いろいろと反省されている。民俗史は日本民俗学の成長とともに発展して来た。数十年にわたって，各種の民俗誌は膨大な数にのぼっている。民俗誌の作成はますます主旨，

具体的な取り扱い方などにつき検討されながら，よい方向に向かって発展していくことであろう。しかも，民俗学者，民俗学の授業を受けた大学生，院生達が積極的に日本各地の市・町・村史の民俗編または市・町・村民俗誌の資料調査，編纂に加わったため，資料集と史・誌は民俗研究の資料としての価値を持っている。

しかし，民俗誌は全国的，統計的に作成したものでないため，それぞれ特色がありながら，記述の方法などにはずれがある。それに，(5)のような大学のサークル，民俗グループなどによって，村を単位にした調査報告書の形でつくられた民俗誌の一部分は散在しているゆえ，研究に利用するのに不便な面がある。

三　民俗地図

民俗地図とは，民俗学におけるある民俗現象の分布・分類・変遷・伝播などを記号で地図に書き込み，現すものである。民俗地図はよく民俗学者にもちいられる。地図に民俗の分類と異同などを一目瞭然に標示する方法は民俗研究の一手段であり，民俗の比較研究，民俗事項の解明などには不可欠の方法でもある。この節で，民俗地図をめぐって論じてみたい。

1．地理学と民俗地図

一つの学問は，多方面にわたって，各角度から研究を進まなければならない。地理学は，人文科学の視点から地理問題を扱い，特殊地理学は「地誌の記載，すなわち世界各地域の位置，地形，気候，生物，土壌と住民の言語，風俗，政治までに説き及ぶべきもの」である[(1)]。民俗学も地理学の方法，視点を借りて，民俗を観察する必要があろう。

ヨーロッパにおいては，かなり前から地理学の視点を民俗学の研究に導入した。ドイツの学者W・マンハルトが，文献・歴史的方法並びに地理的方法を用いて農耕慣行を33項目の質問にして，質問紙法によって，主にドイツ・オーストラリア・ハンガリーに十五万枚にのぼる質問紙を配布して，その民俗資料を地図化して解釈しようとした。のちに集められた資料の地図化は行なわれなかったが，それまでの研究よりさらに一歩進めて地理的方法をその研究に導入して，その点で民俗学地図の先駆といわれた[(2)]。フィンランドの歴史地理学派も地理研究法を歴史研究法と結びつけ，口承文芸の研究に用いた。関敬吾氏によると「今日，ヨーロッパ諸国の民俗学で，民俗地図［volkskunde atlas］をもたず，かつ研究に利用していない国は，きわめてわずか」である[(3)]。

日本民俗学研究においても，地図法をもって，民俗を解釈する例も少なくない。一番最初に作られた正式の民俗地図は，1951年に出版された柳田国男監修，民俗学研究所編集の『民俗学辞典』にある「海女の分布」，「頭上運搬の分布」，「両墓制の分布」と三つの民俗分布図であろう。

次は，日本の民俗地図をめぐって，少し検討してみる。

2．民俗地図の種類・解釈法

日本民俗学における民俗地図法は大体二種類に分けられる。民俗現象を地図に示す方法として，点で表すものと線で表すものの二つの方法があり，地図に示された民俗現象を解釈する方法として，周圏論説と逆周圏論説の二つがある。

民俗現象を分類して，各種の記号で地図に記入する方法は，一般的な民俗地図のパターンであり，民俗学に限らず用いられるので，深く触れないことにする。「線地図」について，少し触れてみたい。

線で民俗現象を地図に示すのが，日本民俗学者小野重朗である。小野氏が鹿児島県で，詳しく一つ一つの村を回って，「民俗圏の調査」をした。その民俗「圏の広がりや，圏と圏の関係などを考えるために，地図の上に描いてみるのが最も効果的なものである」[(1)]と考えたが，今までの民俗地図の描き方を批判して，それがa，地域によって調査の目的も方法も詳しさの程度も違って，全体としての均質性が期待できない。b，ほとんどが点地図であったので，その民俗があることはわ

かっても，他の空白の地点にあるかないか明らかでないと二つの欠点があるため，正しい民俗と言いがたいと指摘した[2]。そこで彼が線で民俗現象を図に示す方法を打ち出し，しかも自ら実行した。彼が鹿児島県内で3年と6ヵ月かかり，870の村落を調べて，いくつかの民俗現象につき，民俗の「圏地図」を作った。これらの地図を根拠にして，民俗の分布・伝播について一説を打ち立てた。しかし，この線地図は小野氏以外に，あまり用いられなかった。

地図に示された民俗現象を周圏論的に解釈するのが柳田国男である。葬墓制研究の分野には，沖縄諸島にある洗骨改葬の習俗と本土の両墓制に関する研究が盛んに行われていた。柳田『葬制の沿革について』という文章にそれらの問題を論じて，中心地より一番離れた南島の洗骨改葬という習俗にこそかなり古い葬法の姿が見られ，近畿地方に分布している両墓制は，洗骨葬のあとに発生したものと論じて，周圏論を墓制研究に用いた。

これに対して，小野氏は，鹿児島県内の調査を通して，反対の解釈を提出した。小野は，柳田と正反対に，「民俗は，受け入れる人々の伝承力の

強弱などによって，同心圏構造を示すものと考えてよい」[3]と主張し，文化の中心地においてこそ，完全な伝承つまり文化の古い姿が見られるのであると指摘した。その例として，彼の調べてきた旧暦七月六日夜の行事であるネブイハナシを挙げた。その分布図は，次のようなものである。調査の結果は，1の部分にあたる地域には行事の最も完全な姿を伝承しているが，2，3，4の順で行くとだんだん内容が簡単になっていて，形がくずれてゆく。この例が，柳田の周圏論では解釈できないので，逆周圏論説を打ち出されたのである。小野氏の逆周圏論説は，民俗地図より読み取る方法であったが，圏地図を作成するには，一つの地域内の村すべてを調べないと作れないので，それを実現するのがかなり難しいことも事実である。

3．二つのレベルの民俗地図

民俗地図というと，まず，方言地図に触れねばならない。方言，民俗語彙の研究が日本民俗学の大きな特徴の一つである。言語研究に，地図法がはやく採用され，優れた成果を示している。そのうち，国立国語研究所の『日本言語地図』は高い評価を受けている。その「日本言語地図」は，日本国土の両端北海道から沖縄までの間に2400ヶ所の調査地を選び，61名の調査協力者が10年の時間を費やして作られたものである。言語研究の世界では，地図で言語の分布，変化の過程などを表すことが極多い。一つの例を挙げると，言語学者の柴田武氏は『方言の世界』という本の中で，方言の分布，音韻の有無と変化，一つ一つ言葉の全国分布と変化などを示して，計33枚の地図を使用した。

現在の民俗地図は，一応行政レベルで調査して作成したものと，学者が個人レベルで民俗分布図を作成して，論文のなかで分析，解釈に使用したものの二種類がある。

行政レベルの民俗地図は，文化庁編『日本民俗地図』がまずあげられる。かつて，「文化財専門審議会民俗資料部会」のメンバーであった岡正雄，関敬吾両氏が，ドイツなどヨーロッパの民俗地図を示し，その効用を説き，日本においても民俗の比較研究と民俗資料保存の上から民俗分布図を作成すべきことを提唱し，それが「日本民俗地図作成・刊行の発端」となった[1]。文化庁の前身であった文化財保護委員会は，1962年から1964年まで，1県30地区ごとを20項目にわたり民俗緊急調査を実施して，1342ヶ所の地区で20項目についての調査資料を集積してきて地図化したのである。

個人レベルの民俗地図はそれぞれの論文か著書に散在するので，確かな数はわかりかねるが，民

俗分布図は民俗研究に欠かすことのできない一手段としてよく作られ，使われることは事実である。日本の葬墓制研究について，二，三の例を上げてみる。

二ヶ所の墓を作り，死者を葬って，詣る習慣は，周知の通り，日本全土に行われることではない。その分布地域の歴史・社会の特徴から両墓制存在の原因を把握するのが一つの研究方法である。そのため，まず分布図の作成が必要となる。柳田国男が監修した『民俗学辞典』に載っている両墓制の分布図〈図２〉と佐藤米司の「両墓制の分布図〈図１〉」を例にする。

この二つの両墓制の分布図は，一つの共通点があり，それが両墓制慣習の有無だけを地図に示すことである。両墓制と言っても，何種類のパターンがあり，距離的に二つが離れたり，隣接したりするとか，時間的に埋葬地での祭祀を早くやめたり，またはきまった時間のみまつるとかの差異があり，このようなことを，この二つの単純な分布図から読み取れない。そこで，最上氏のような両墓制分布図が必要となる。

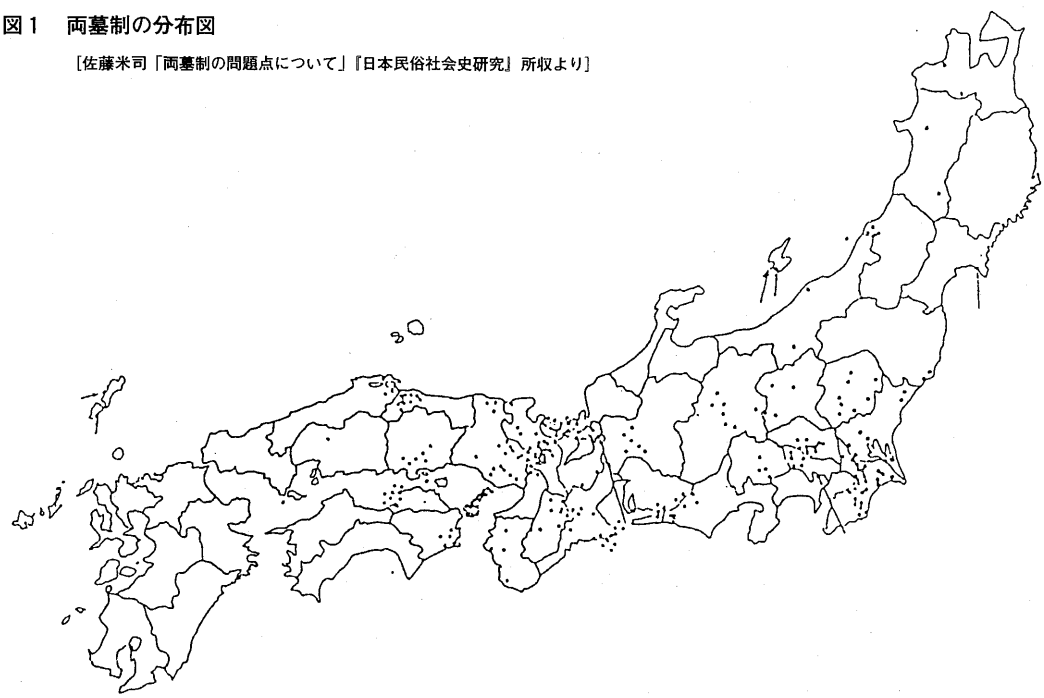
図３に上げられる最上孝敬の両墓制分布図はただ両墓制習慣の有無を示すだけでなく，同時にその祭り方によって生じた違いもそれぞれ記号で分布図に示してある。

基本的には，両墓制は土葬の一種である。葬法の角度から，現在一般に行われている火葬との関連を探り出し，両墓制の本質をつかもうとする研究者もいる。そこで，土葬の両墓制と火葬法の分布図が作られた。図４は堀一郎著『民間信仰』よりとった「葬制一覧図」である。

また，両墓制の村で二つの墓の称呼は，普通のハカ・ボチではなく，サンマイ・ステバカ・ミハカ・イケバカなどである。その呼び名の分布と，火葬地域，単墓制地域のハカなどの呼び名の分布を地図で表し，そこに新しい研究視点をおく研究者もいる。新谷尚紀が墓地の称呼から両墓制を新しく認識した。新谷氏は近畿地方を中心とした地域において，サンマイという呼称は両墓制における埋め墓を指すが，近畿地方の両墓制地域に隣接

図１　両墓制の分布図

［佐藤米司「両墓制の問題点について」『日本民俗社会史研究』所収より］



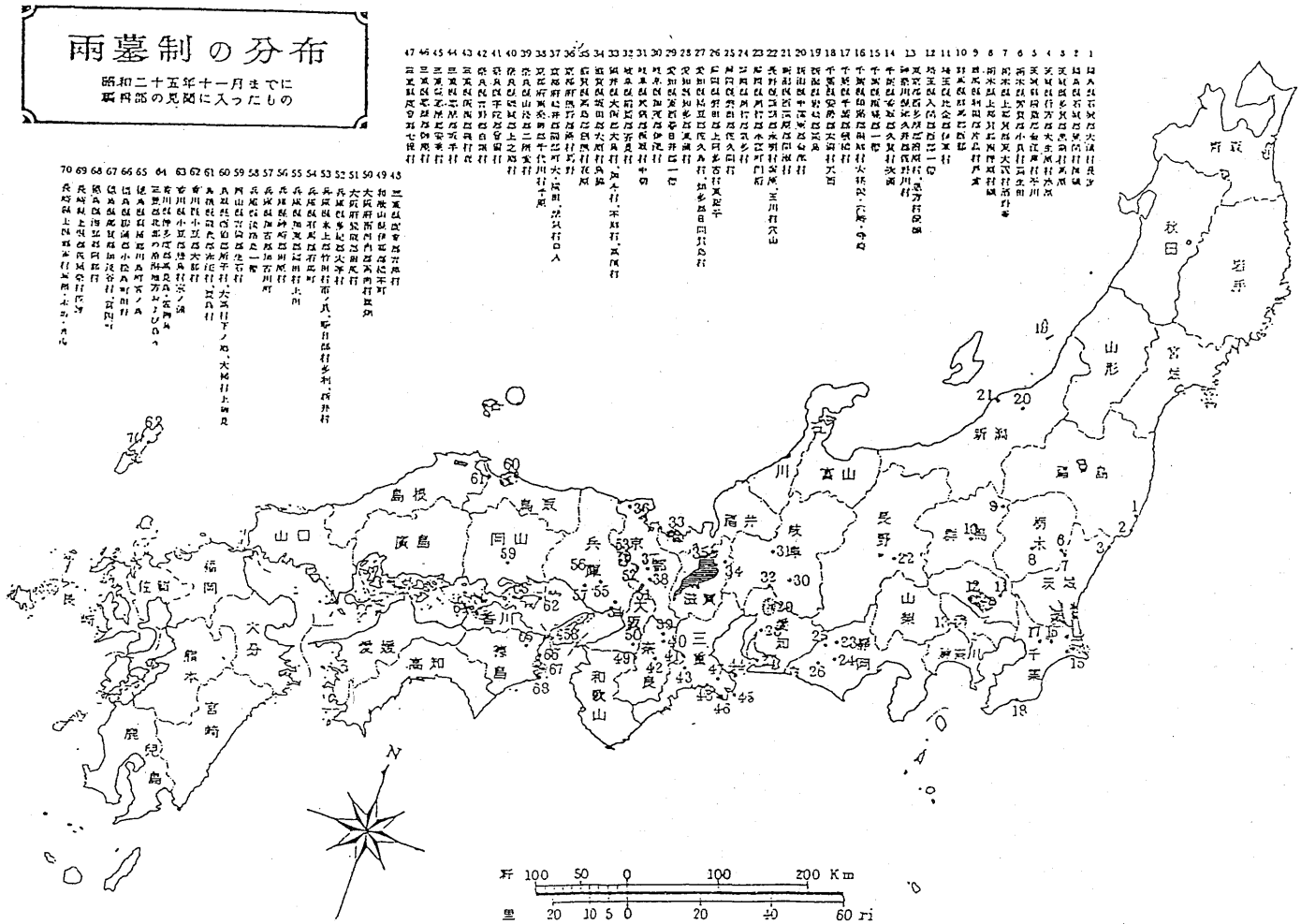


図２　［柳田国男監修『民俗学辞典』より］

図3　両墓制分布図

［最上孝敬原図『日本民俗学大系』4巻より］

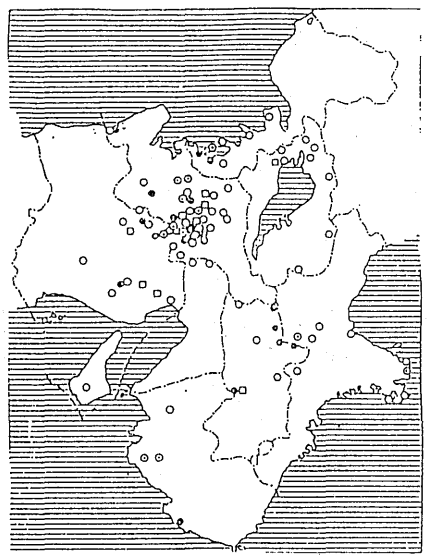
◎埋め墓よりまいり墓へ祭地を早期に移転する

●埋め墓よりまいり墓へ祭地を●●に移転する

□両墓をとっもに祭地とする

△同上，ただし埋め墓へは彼岸などにもまいる

○上記の点不明のもの



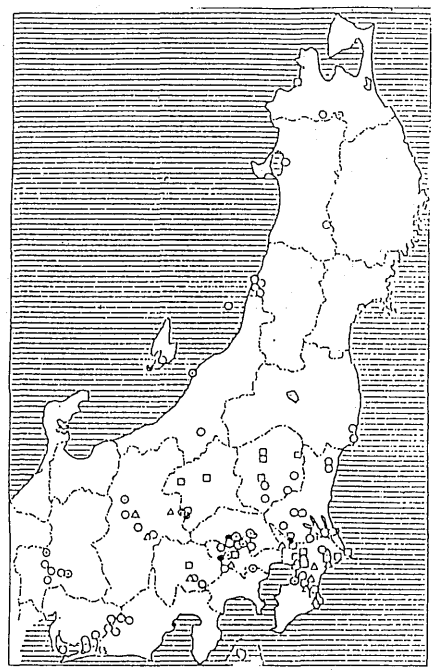
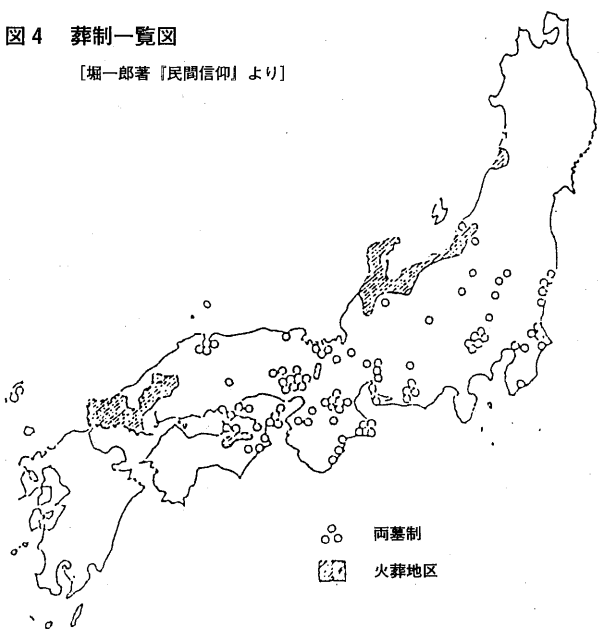


図4　葬制一覧図

［堀一郎著『民間信仰』より］



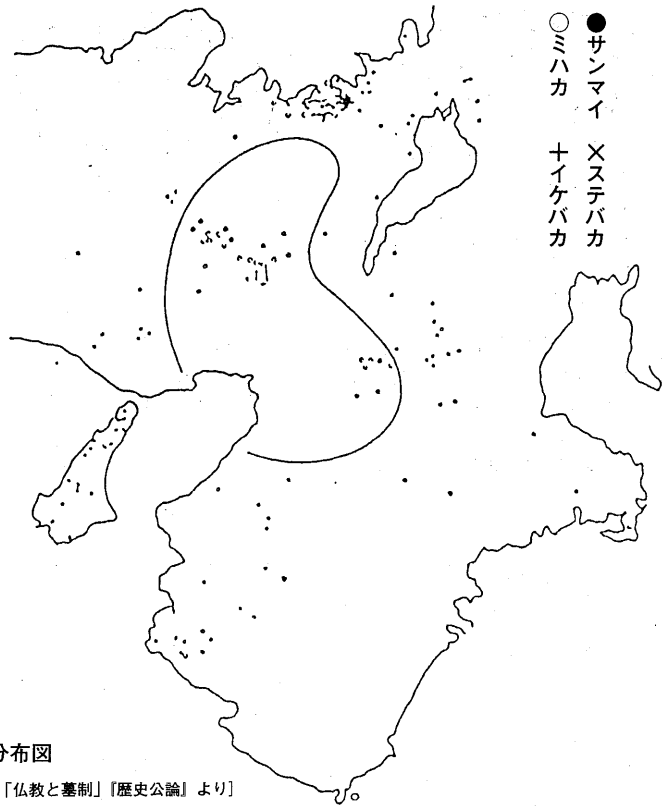


図5　墓地称呼分布図

［新谷尚紀　「仏教と墓制」『歴史公論』より］

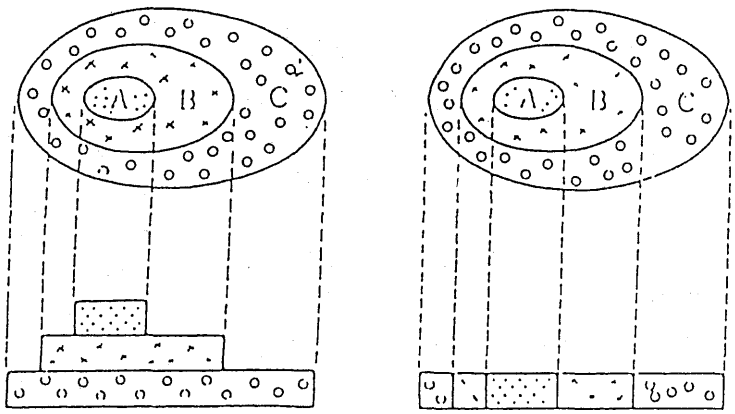
する火葬地帯および単墓制地帯において，その語は「それぞれ火葬場の呼称，それに単墓制の墓地の呼称として使用されている例も多い」と指摘した[(2)]。図5が，近畿地方における墓地に対する呼称分布図である[(3)]。

以上あげたのは，民俗研究者個人レベルで研究論文に用いられた民俗地図の2，3の例である。地図法は民俗研究の一補助手段として，かなりの役目を果たした。

4．民俗地図の再検討

民俗地図法が，民俗研究の一方法として，よく用いられる。しかし，民俗地図はどう作るべきか，また，民俗分布図をどう読み取るかなどについての検討があまりなかったようである。1975年『民俗学評論・13号』には大塚民俗学会のシンポジウム「民俗地図をめぐって」の発表内容をのせ，発表者は文化庁の『日本民俗地図』の作成について説明し，ヨーロッパにおける民俗地図の作成をも紹介した。また1960年小野重朗の論文「民俗調査の方法―民俗地図作成をめぐって」，と1979年同氏の「民俗地図による地域研究」が民俗地図法の作成と読み取りをめぐって論じたものである。1984年に出版された福田アジオの『日本民俗学方法序説』の中にも民俗地図の検討について述べた。次は，民俗地図の役目と問題点について，考えてみよう。

民俗事象の類型，変遷などの分布を地図に示せば，たしかに，文字，データ，グラフより便利で，一目でわかるが，しかし，ただこれだけのためなら，民俗研究の一方法とは言いかねる。民俗地図が民俗学の研究に役立つのは民俗分布の標表する



重層同心圏構造　　単層同心圏構造

図6

ことにはなく，民俗分布の解明にある。小野氏の指摘のように，民俗分布図が「その民俗の持つ性格や歴史やその地域との関係などを知るということ」に役立つ[1]。小野氏は一つの民俗事象の分布を線で結び，地図上に圏で民俗存在の有無を表す方法を取り，その圏の形や民俗圏の重なりからいくつかの型をまとめ，その民俗分布の解明に努めた。そこで，民俗分布の「単層同心圏構造」と「重層同心圏構造」説を打ち出し，民俗地図を研究する上に，民俗文化の伝播について新説を提出した。小野氏は，線で民俗地図を研究する上に，民俗文化の伝播について新説を提出した。小野氏によると，線で民俗事象を示す場合，「共通の中心をもって内側から外側へ並んでいるもの」となり，それを「民俗分布図」と呼ぶが，さらに二つに分け，「単層同心圏構造」と「重層同心圏構造」となり，次の図6の通りである。

小野氏の解釈によると，柳田国男の周圏論説は単層同心圏構造と同じものであるが，事実上は，調査によって描かれた分布図には，単層同心圏構造があまりないということである。また，小野氏自らの調査結果では，実に重層同心圏構造が多く，柳田の周圏論と反対に，中心のAにあたるところでは，同時にB，Cの民俗事象が見られ，Bの部分ではCの民俗事象が見られ，一番外側のCには民俗伝承のくずれたものしかない。そこで，柳田説と反対する逆周圏説を打ち出し，その外，小野氏は鹿児島で民家構造を調べ，「二ツ家」の分布図を民俗分布図で示し，その分布図はかつての支配圏とほとんど厳密に一致していることがわかった。地域文化の性格と地域性の研究にも役立つ例である。前に触れた両墓制分布図は，ひとつ限られた地域ではなく，日本全国の民俗分布と民俗の比較研究に民俗地図も役立った例である。全体的に両墓制の分布を見ると，近畿地方に密集的に両墓制習慣の存在することが一目でわかり，近畿地方の文化，伝統，歴史の変遷などから両墓制の本質を考える研究者が数多くいて，民俗分布図からヒントを受けたと言えよう。

民俗分布図は，ひとつの地域の文化特質を認識することにも各地域の民俗が日本全体の上でどのような分布の位置を占めるかを知るにも役立つ。

しかし，民俗地図が，今までの民俗研究に活用され，役に立ったにもかかわらず，その作成と応用には，問題がないとは言えなかろう。民俗地図の作成に関する技術的な問題を本文に触れないこ

とにして，民俗地図をどう読み取るかにつき，少し考えてみたい。

民俗地図に示したのは，一定の時点において伝承されている民俗である。一つの地域においても，一つの民俗事項の伝承が必ずしも同じかたちで伝わっているわけではない。それがただ歴史の変遷を反映することでなく，主に一つの時点において，ある地域の民俗文化の特徴を表している。言いかえれば，柳田の周圏説で解釈したように，時間的，縦方向にその地域の民俗分布を読むのではなく，現時点で横方向に現存民俗の相互関係が考えられるのである。

勿論，地域文化の伝播，変化の法則を把握するには，地図法のみでできることではないが，地域性の研究には，民俗地図法の重要さも認めなければならないであろう。

民俗地図の作成に，今までの個人的な作成のほか，文化庁の作った『日本民俗地図』のような大規模的，組織的な地図作成が望ましい。文化庁作成の日本民俗地図に『解説』があり，いまでは，地図よりは『解説』がよく利用されているようであるが，それを検討し，もっと研究に合わせた地図を作ればよかろう。

前に述べた小野重朗の「圏地図」が注目されたものであるが，短期間にそれを完成するのは困難である。しかし，小野氏の主張した地図の作成法を読み取るほうが研究の参考になろう。

日本民俗学における地域研究をめぐる理論と研究法などの歴史を辿りながら検討してきた。数十年にわたって，数多くの地域研究の成果をおさめた日本民俗学のことを見ながら，日本民俗学とほぼ同じ時期にスタートした母国の民俗学には，地域研究の視点，民俗誌，民俗地図などの地域研究法を学び取る必要があることを痛感する。次は，地域研究の角度から中国民俗学のことを少し考えてみよう。

四　中国民俗学と地域研究

1．地域意識

中国は面積が広いし，しかも多民族であり，歴史的な変遷も複雑であるため，東西南北地理的な差異が激しく，各地方の民俗文化の差異が予想される。中国より遙かに狭い日本列島いわゆる単一民族の民俗文化であっても，地域によってかなり異なる特徴を示しているので，同じ漢民俗の民俗というものの，南北地域の差，他民族との文化融合，影響などで，相違が大きいと考えられる。しかし，民俗研究論文には，歴代の文献資料を大量に使用されていることに対して，実地調査資料を用い，地域地域の特徴即ち民俗の地域性を論じるものがほとんどなかった。発足は1930年代にも遡る中国民俗学は，その後，各種の原因で，研究が進まなかった。従って，民俗研究理論においては系統的な方法論がない。80年代以後，民俗学は新たな発展期を迎え，民俗研究の理論概説的なものもあったが，民俗の地域性，地域研究にはあまり明確に論じていないようであった。また，どこかある地域の民俗事項の例を用い，地域特色など触れずに国全体または民俗全体の民俗を論じる文章が多いようであり，使用された民俗資料がどの地域のものか全然分からない研究論文もある。また，せっかく調査した民俗資料でも調査地を詳しく［県，鎮，郷，村まで］表示しなかったこともしばしばある。これが，好ましくないことであるが，現状である。これらが，民俗研究を深める妨げであり，民俗研究に地域意識が薄いことの反映であると思われる。

民俗は地域環境と密接に関連し，其地域の自然，地理条件に左右されながら，その地域の歴史的，社会的構造に大きな影響を受けて形成されたものである。同一民族の習俗であっても，地域が異なれば習俗の形式や内容も異なるし，異なった民族の習俗は同じ地域環境におけば，似たものも見出される。地域別の研究をし，理解をして，其の上に一つの国または一つの民族の民俗文化が理解できると言えるのではなかろうか。地域性を認める上に民俗調査と研究の方法を明確にすることが，中国民俗学において避けることのできない問題の一つ，いやこれから一層の着実な発展を計るには，

検討すべき一大問題ではないかと思われる。

この数年，自らフィールド・ワークして研究を進めたり，民俗誌を作ったりする民俗研究者特に若手研究者が現れてきて，よい傾向を示しているが，具体的な調査の技術，調査項目の設定，調査対象との接し方，記録の方法，調査報告書の作成などを一定程度に検討して認識を統一しておけば，もっと望ましい成果を収めるであろう。

研究論文にも調査報告にも，中国の場合，図表で分布，変遷などを示すのが，ほとんど見当たらない。今後，民俗地図法を取り入れれば，研究が一段と進められよう。次に，民俗誌の現状を述べてみよう。

2．民俗誌の現状

中国の民俗誌は2種類に分けられる。一つは，地方誌の「風俗」の部分，一つは，風俗，民俗専門誌である。

歴史の古い国であるため，歴代の地方誌が膨大なものでありながら，民俗の記述は極簡略であった。国レベルでは行政的に80年代から新地方誌の編纂が進められ，1990年の統計では，1985年から新たに刊行された地方誌が250数部にのぼり，チベットを除き，各省に地方誌編纂事務室が設けられ，編纂の参加者は十万もいるそうである。

浙江省蘭渓市文化誌の編纂は1985年から始まり，資料は一番基層にある村より集め，村文化誌→郷文化誌→市文化誌の順序によって，51ヶ郷の文化誌を基礎に成したもので，資料の確実性の高いものであり，研究に大きな参考価値のあるものである[(1)]。

もう一つの例，1986年11月に出版された48万字数もある『浙江簡誌』之五の『浙江風俗簡誌』は，当地民俗学会が編纂の担当をしたため，民俗誌にもなっていて，民俗研究において重視されているものである。本書は「浙江風俗概説」の下に，行政的な「地区」を地域の単位にし，境内に人数が多かった少数民俗の畲族を独立の篇で述べ，合わせて12篇を設けてある。そして，民俗の地域的な特徴と違いを注意しながら，「地区」ごとに民間の慣習を記録した。例えば，篇ごとに概述，生産，生活，儀礼，歳時，社会と6章に分けているが，杭州市郊外に差別されていた「九姓漁戸」がいるため，それを記述する第7章をも設けた。同様に，紹興篇に「堕民」章，金華篇に「小姓」章を1章増やして述べた。寧波は古代から商業都市であったため，商業習俗という章を増やしたのである。民俗学にとって非常によいことである。しかし，全国的に大規模な新地方誌の編纂に，民俗学関係者の参与が極限られていて，民俗学が活躍できず，残念なことである。それに，経費を原因に各省・県・市の史，誌の基礎資料となった，民俗研究にとっては最も貴重な鎮，郷，村の史，誌資料が活字にならず，研究に利用できないことは，残念でたまらない。民俗が急変している時代の中で，いままで存在していた民俗を記録したものを大事に保存することは，中国民俗学の一つの使命ではなかろうか。

風俗，民俗専門誌の作成と刊行は地方誌とちがって，国レベルで系統的に組織され，作成するものでない。特徴として，個人かグループ合作で作ったものが多いようで，一定範囲内のフィールド・ワークのもとで風俗，民俗を記録したり，記述したのがもう一つの特徴である。

手元にある極わずかの資料を紹介してみよう。

1984年5月，浙江省の『金華地方風俗誌』が金華地区群衆芸術館によって印刷して刊行された。13万字数の薄い本であるのが，地区風俗誌を編纂する前，まず当地区所属の2市11県の文化関係者たちが村々をまわって集めて来た資料で13冊の風俗誌を編纂し，その上で地区風俗誌を作ったのが特徴である。それに叢書として，金華地方風俗誌のほか，金華風俗誌，武義風俗誌，永康風俗誌，磐安風俗誌，東陽風俗誌，義烏風俗誌，浦江風俗誌，蘭渓風俗誌，龍遊風俗誌，江山風俗誌，常山風俗誌，開化風俗誌が活字となったことは，非常に稀な例である。金華地方風俗誌の内容の記述には，各県市における同一風俗の相違点などを触れていることはよかったが，民俗資料とすれば，民俗現像の存在年代がはっきりしていないことなど

が，不足の点である。

1988年3月，山曼，李万鵬，姜文華，葉涛，王殿基5人の合作した，34万字数の『山島民俗』が出版された。歳時時候・衣食住行・人生儀礼・家族郷社・生産貿易・信仰禁忌・遊芸競技と七つの項目にわけ，その下さらに26の細目で述べている。

本の「後記」によれば，主に現代漢民族の民俗を記述することを主旨としたこの地域民俗誌の資料は，(1)，編纂者による近年の調査，(2)，山東大学中文系編の「山東方誌民俗資料彙編」，(3)，山東大学社会学系民俗研究所の所蔵している90数名の義務調査員の書いた200部近くの調査報告書などによったそうであり，間接資料を大量に使用したようである。山東省地方の風俗習慣につき，このように全面的にまとめるものが今までなかったものなので，貴重な試みであったが，省内民俗の相違をあまり触れていないのが欠点であろう。

『林県民俗誌』が1988年11月出版され，生産習俗・生活習慣・集会貿易・郷里社会・人生儀礼・民間信仰・歳時時候・民間遊芸などの8章47節にわけて，河南省の一つの県の民俗を記述している。なかには，1986年まで民間に生きた民俗慣習を記入され，民間信仰，庶民の風水観念などを客観的に記録しているのが有り難いことである。

1990年に，村を単位にした民俗誌が2冊刊行された。それが華北平野にある河北省『耿村民俗』と福建省恵安県『崇武大岹村調査』である。

『耿村民俗』を調査して書いた担当者のほとんどは民俗学専門の出身でないが，口承文芸関係者で，民間故事，民謡採集の経験者たちであったため，なるべく村民の言葉で記録し，文末に「資料提供者」の形で村民の名前をも並べてある。風水思想，冥婚俗などが今日になお村に存在していることと民俗の変遷が伺えるのが，この18万字の村民俗誌の長所であろう。

『崇武大岹村調査』がアモイ大学人類学系の教師と大学院生，大学生が恵安県誌事務室と共同で行った調査報告集である。21万字もあったこの報告集は文化人類学専門の研究者，専攻の学生たちが調査の担当をしたため，環境［自然，地理］，歴史の沿革，人口変更，体質分析，言語なども調査され，厳密的な方法論の指導のもとで行った調査と言える。

個人レベルで民俗誌を書くのは稀であるが，劉兆元著の『海州民俗誌』［1991．10 43万字］が一つの例である。著者が8年もかかって民俗調査をして，海州――今日の江蘇省連雲港市あたりの風俗習慣を産育．婚姻．喪葬．信仰．祭り．厄除け．親族．財産．服飾．住宅．飲食．儀礼．教育．娯楽．農．漁．林．塩．商．手工．サービス各業計28巻883細目で細かく記述し，当地域内の民俗の相違を分野別に述べている。この本から，江蘇省内の1地域における1940年代までの民俗と今日まで生きている民俗がわかる。民俗の地域性を意識しながら，長年の努力で個人の力で一つの地域民俗誌を完成して出版までもなったが，なかなか大変なことであろう。

1950年代に入ってから二十数年の間，伝統文化，風俗習慣などが封建的なものとされて，幾度も批判されたりした結果，今日50代以下の世代は民俗の内容，昔からのしきたりなどがわからなくなったし，1980年代からの経済改革で，人々の生活がさらに急変したので，記録されている民俗資料がますます貴重な価値を示す。民俗調査によった民俗誌の作成が一つの緊急の仕事であろう。

むすび

以上日本民俗の地域研究をめぐり，理論的な認識と具体的な民俗を記録し，表す方法を論じた。日本民俗学の研究方法に，この地域研究法に属する地域分析法，民俗地図法のほか，民俗調査法，共同研究法，さらに個別分析法，比較研究法などがある。日本民俗学における地域研究，その研究の規模，研究の深さと詳細さが日本民俗学の1つの特徴となり，日本民俗学研究に有効な役割りを果した。この地域ごとの着実な研究によって，初めて日本の東と西，本土と離島，都市とムラなどの民俗の相違がわかり，民俗事象の分布とその変遷法則がわかるようになった。民俗の地方差，ま

たは地域性は，文化の構成を表し，その特徴を示す。この地域研究の進んだ上に，日本の全国的な民俗の把握が可能となり，日本民俗文化の認識も進んだ上に，全国的な民俗の把握が可能となり，日本民俗文化の認識もできるわけである。しかし，あくまでも，民俗地域性の研究は，１つの民族１つの国の文化特性を認識するのが目的であるため，村ごと，民俗事象ごとの研究は，最終的にこの目的をもって行なわれないと，ただの詳細な研究のみにとどまったら，その重大な意義が失われてしまう。つまり，地域研究は最終の目的を持って行うことである。

中国の民俗研究は，文献資料による研究が主流となって，現存民俗の研究も，研究者自ら調査した資料によったものが少ない。また各地の民俗特徴を充分把握せず，その資料を並べ，総括的に研究したりすることが多いようである。それ故，中国における民俗研究には民俗の地域研究の薦めが必要となろう。その際，日本民俗学の数十年にわたって行われてきた地域研究の経験が大きな参考になる。着実な実地調査の資料により，各種の民俗地図を描き，詳細の民俗誌をつくり，地域ごとの民俗特性を把握するうえに，漢民族の民俗文化を全体的に認識することが，中国民俗学の今後の一大課題であり，民俗学世界の若い世代の使命であろう。

注序

(1)柳田国男『郷土生活の研究』1935年。柳田の分類によると次の通りとなる。

有形文化：住居・衣服・食物・資料取得方法・交通・労働・村・連合・家・親族・婚姻・誕生・厄・葬事・年中行事・神祭・占法・呪法・舞踊・競技・童戯と玩具

無形文化：新語作成・新文句・諺・謎・唄えごと・童言葉・歌謡・語り物と昔と伝説

心意現象：知識・生活技術・生活目的

(2)柳田国男『郷土生活の研究』1935年　8ページ

第一章　1．

(1)坪井洋文「年中行事の地域性と社会性」『日本民俗学会報』7

(2)柳田国男「婚姻の話」定本柳田国男全集15巻

(3)　(4)　(5)　(2)に同じ

(6)桜田勝徳「村とは何か」『日本民俗学大系』3

(7)　(6)に同じ

(8)桜田勝徳・宮本常一「日本民俗の地域的性格」

(9)千葉徳爾「民俗と地域形成」『千葉徳爾著作集』

(10)　(1)に同じ

2．

(1)1927年４月から四回にわたって『人類学雑誌』に掲載

(2)『蝸牛考』定本柳田国男集18巻 12ページ 筑摩書房 1963年

(3)福田アジオ著『日本民俗学方法序説――柳田国男と民俗学――』 弘文堂 1984年11月

(4)和歌森太郎『日本民俗学概説』 1947年。

(5)柳田国男監修・民俗研究所編『民俗学辞典』1951年。「方言周圏説」の項

(6)牧田茂『生活の古典―民俗学入門』 1952年

(7)福田アジオ「周圏論の歴史」,『日本民俗学会報』60

(8)千葉徳爾「民俗周圏論の検討」『現代日本民俗学』

(9)　(8)に同じ

(10)福田アジオ『日本民俗学方法序説』 1989年

(11)小野重朗「民家の構造と周圏論」

(12)小野重朗「民俗研究の方法」

第二章　1．

(1)坪井洋文「民俗調査の歴史」

2．

(1)柳田国男指導・日本民俗学会編・1966年出版

(2)1983・1984年

(3)岩田重則「市史編纂と日本民俗学」『裾野市史研究』

(4)山本質素「市史民俗編のあり方について」・『伊勢崎市史研究』 71ページ

(5) (3)に同じ

(6)1978年 3月刊

第三章 1.

(1)大島襄二著『文化地理学序説』

(2) (3)関敬吾「民俗学における民俗地図の問題」『民俗学評論・13号・民俗地図をめぐって』

2.

(1) (2) 第一章2.(12)に同じ

(3)小野重朗「民俗分布の同心圏構造について」

3.

(1)木下忠「民俗地図をめぐって」

(2) (3)新谷尚紀「仏教と墓制」『歴史公論』1980年 3月

4.

(1)小野重朗『農耕儀礼の研究』

第四章 2.

(1)正式に活字になっていないのが残念である。

新刊紹介

白山人類学研究会

『白山人類学』 2

本書は東洋大学社会学科研究室に事務局を置く白山人類学会が発行するもので，人類学に関する研究成果が中核をなしている。月例研究会の記録によると，大学院社会学研究科に所属する院生の研究発表の場であり，また研究指導に当る教員の論文を掲載する場となっていることが分かる。記録された16篇の論文は日本，韓国，中国，東南アジアをフィールドとした手がたい調査によって得た資料にもとづくものとなっている。研究会が八丈島の調査プロジェクトを開始したところなので，いずれその成果もここに公表されることになるはずである。このように月例研究会，調査プロジェクト，論文の公刊が連携している，いはば理想的な形がここにみられる。

韓国に関するものでは「韓国人定期市像に出遇う」(檜山勝彦)，「韓国慶尚南道仙倉の父系親族」(金 美栄)，「韓国における契の一考察」(奥間葉子) があり，中国に関しては「中国朝鮮族の民族相撲(シルム)の構造」(宇佐美隆憲) が収録されている。これらには指導をしている松本誠一氏の韓国研究の影響もあるかもしれないが，志摩地方の共同で行ったフィールドワークとその後の討論によって得られた，事象を見ていくうえでの視角が相当検討されたという印象が深い。また巻頭論文の長野晃子氏の「民話が教える心の習慣――『忠臣蔵』と遵法精神――」は比較文化論として興味ある素材をとりあげている。 (古家 信平)

A5判 295頁 白山人類学会
1993年6月刊